

高専社会科公民分野における SDGs を題材としたパフォーマンス課題の開発

—協働的な授業研究をもとに—

山下 大喜

Development of Performance Task on SDGs for Social Studies in KOSEN Education:
Through Collaborative Lesson Study

YAMASHITA Daiki

(Received September 30, 2025)

キーワード：高専教育、社会科、パフォーマンス課題、授業研究、SDGs

はじめに

本稿は、パフォーマンス課題の開発的研究について、高等専門学校（以下、高専）の社会科公民分野で SDGs を題材に実践したものを検証しようとするものである。

高専は戦後の高度経済成長期のなかで「中堅技術者の育成」に応える形で創設された⁽¹⁾。高専教育の特色としては、「柔軟な発想力や想像力の育成効果が期待できる中学卒業後の 15 歳の学生を受け入れ、受験による中断のない 5 年間一貫の教育課程を通して、確実な専門知識と実践の場で必要な技術力、さらに社会や産業を支え、変革を促す創造性を備えた人材を育成してきた」ことがあげられる⁽²⁾。ここでいう教育課程について、「質保証の基盤」となる「モデルコアカリキュラム（以下、MCC）」があり、MCC を大綱的基準としながら自律的に各高専がそれぞれの特色を活かした魅力的な教育課程を編成することになっている⁽³⁾。

高専教育において社会科は一般教育（リベラルアーツ）に位置している。岩本晃代は、高専を「疑似的な『複線型』」の教育制度としてとらえ、専門教育と一般教育の「くさび型教育課程」の構造をとっていることから、「他種の学校との接続関係を念頭においたより一層の創意工夫が必要であろう」と論じている⁽⁴⁾。そのうえで、一般教育の社会科に焦点化したとき、原田桃子が指摘するように、「国際的に繋がる社会の多様な問題を解決できる技術者育成のために、自らが生きる世界が歴史的にどのように構築されてきたのか、幅広い視野を持たせる」ことが重要となる⁽⁵⁾。ここで有効となりうるのが本稿の実践で主題とした「持続可能な開発目標（SDGs）」である。SDGs は国連から提唱され、2030 年までの達成がめざされている。「SDGs 時代の教育」について、松倉紗野香は「参加型学習や課題提起型といった『学習者主体』となる学び、さらに教科と教科、学校と社会を『つなぐ』学びのあり方が求められる」としている⁽⁶⁾。さらに、グローバル教育との接点を考えたとき、SDGs を主題にすえた開発的研究について、石森広美は、「世界全体の課題である SDGs のゴールの解決にいかに関与していくかや、次なるアクションに向けたプランを盛り込んだり、実際に行動した結果からの気づきを含めたりすると、地球市民としての姿勢育成まで包摂された、グローバル教育としてのより良い実践となる」とその意義を論じている⁽⁷⁾。

以上の背景をふまえて、本稿では、高専社会科公民分野「現代社会 A」の授業でパフォーマンス課題を設定した実践に着目する。当該の実践は論者が担当した開発的研究にあたるものである。SDGs を題材とした高専教育の先行事例として熊本高専の「八代モデル」がある⁽⁸⁾。日本高専学会でも特集「SDGs と高専教育」が組まれている⁽⁹⁾。これらの蓄積に学びながら、本実践は他校種にも開かれた協働的な授業研究を志向しつつ、SDGs を題材としたパフォーマンス課題を中核にすえた点に独自性がある。第 1 節では、カリキュラム研究の観点からパフォーマンス課題の実践的意義について論じる。第 2 節では、社会科公民分野のカリキュ

ラム構造をふまえながら、「現代社会 A」の展開過程について論じる。そのうえで、第3節では、パフォーマンス課題の位置づけを示したうえで、実際の作品例を検討していく。

1. カリキュラムレベルからみたパフォーマンス課題の実践的意義

高専教育において社会科は一般教育に位置づいている。MCC では到達目標として「分野共通の基礎的能力」が明記されている⁽¹⁰⁾。一般教育であることから、到達目標の水準は「Level1：知識・記憶」、「Level2：理解」、「Level3：適用」までの達成がめざされ、基礎・基本の確実な「習得」とその土台をもとにした「活用」が重要視されている⁽¹¹⁾。高学年では専門教育に重きがおかれることから、一般教育では「Level4：実践」へとつながる視点をもつことも重要となる。

ここで留意したいのは、溝上慎一が指摘するように、「特定領域を超える汎用的な資質・能力を育てるプログラムであるのに、その実践においては特定領域の課題に頼らざるを得ない構造的ジレンマがある」という点である⁽¹²⁾。この課題に対して、溝上慎一は学習指導要領をもとに二つの方途を示している。

第一に、いわゆる学習の型とも呼ばれる「習得・活用・探究」である。学習指導要領において、「探究」は「教科の学習（習得・活用）」と連続的に位置づけられている⁽¹³⁾。「活用」型や「探究」型の学習が視野に入ること、「資質・能力の転移可能性」や「真正の学び」を具現化することができる⁽¹⁴⁾。このときに有効となるのが、本稿の主題であるパフォーマンス課題の実践である。先にあげたように、高専教育での社会科は一般教育に位置することから、確実な「習得」とその「活用」、そして「探究につなぐ」という点においてパフォーマンス課題の実践がそれぞれの架け橋になりうるといえる⁽¹⁵⁾。

第二に、溝上があげているのはカリキュラム・マネジメントである。カリキュラム・マネジメントは、学校教育目標の具現化を基軸としており、その達成に向けて R-PDCA サイクルをもとに教育活動の質保証と改善をはかることである⁽¹⁶⁾。高専教育においても、各校がそれぞれの教育理念や三つのポリシーにもとづいて教学マネジメントの体制がしかれている。カリキュラム・マネジメントと教学マネジメントは近接した概念である⁽¹⁷⁾。マクロの視点として学校全体でのカリキュラムの連動性を担保したうえで、それを支えるサブシステムとして教科カリキュラムでの授業研究が位置づいている⁽¹⁸⁾。本稿の実践も、学校の教育理念やポリシーにある「豊かな国際性」や「複眼的視野」などを念頭に SDGs を取り組む単元の主眼にして、そのうえで同じく教育理念やポリシーに明示されている「創造」や「探究」を志向するために単元の山場としてパフォーマンス課題を設定した。このようにカリキュラム全体を見通し、実践の位置づけを明確化させることで、資質・能力の育成にも連動性を見出すことができ、最終的にはその連動性が学校教育目標の具現化への鍵にもなるのである。

2. 「現代社会 A」の展開過程

高専教育では、専門教育と一般教育が「くさび型」のカリキュラム構造をとっている。前節では、学習指導要領をもとにした溝上慎一の議論を援用して、高専教育におけるカリキュラム研究の視点とパフォーマンス課題の実践的意義を論じた。高専は、高校から大学へと連なる教育課程の設計とは根本的に異なるとしながらも、「中等教育後期課程の学齢を含む学生を受け入れている」ことから、MCC では学習指導要領との対応関係が示されている⁽¹⁹⁾。

本稿で対象とするのは社会科公民分野での実践である。社会科全体と公民分野の到達目標は、以下のよう
に明記されている（次頁：表1）⁽²⁰⁾。社会科全体としては、「国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として主体的に社会に参画し、社会が抱える諸問題の解決のために人文・社会科学の知識・理論・情報を利用できる」とことと目標が記されている。この全体目標に対して、「地理歴史的分野」、「公民的分野」、「現代社会の考察」の到達目標が位置づいている。学習内容との関係性において、以下の二点に指導上で工夫しうる点を見出すことができる。

第一に、社会科および関連領域の学習内容として SDGs が位置づけられている点である。まず、社会科では、「国際社会における持続可能な社会の実現を目指す取り組み」を意識しながら、SDGs を単元の主眼にするとき、「環境だけではなく社会、経済の諸側面で構成されていることに留意して学習を進めること」とされている⁽²¹⁾。さらに、関連領域である技術者倫理にも SDGs が位置づいており、「地域社会、わが国、及び国際

社会が直面している問題や実現すべき課題について理解し、説明することができる」とされている⁽²²⁾。授業デザインという段階では、大綱的基準であるMCCに明記されている目標論や内容論をふまえ、実際の展開過程を構想する必要がある。本実践では、このMCCにおけるSDGsの位置づけをふまえて、SDGsのゴールと関連する各領域の学習を科目の前半にしたうえで、その土台をもとに単元の山場としてパフォーマンス課題を提示した。

第二に、人文・社会科学の見地を活かしながら、社会とのかかわりのなかで直面する課題と向き合い、「真正性」のある学びを展開できるかどうかという点である。社会科では、表1にある「現代社会の考察」との関係で、「人文・社会科学の方法を用いて、学生が技術者としての自分と身の回りとを批判的・相対的に捉える能力を育成し、社会との関わりの中で主体的に思考し行動する姿勢を涵養することが期待される」とある⁽²³⁾。知識一辺倒にとどまらないためには、「真正性」のある学びが展開できるかどうかが重要になる。松下佳代は、パフォーマンス課題に「文脈の真正性」と「プロセスの真正性」の二点が求められるとしている⁽²⁴⁾。さらに、パフォーマンス課題に取り組むプロセスにおいて学生自身が自らの学びを見通す「学習としての評価」が重要であると論じている⁽²⁵⁾。本実践では、確実な「習得」と「活用」を意識しながら、「真正性」のある学びとするために、パフォーマンス課題を設定し、そのなかに対象（宛先）である小学生やSDGsの社会的効果を組み込んだ形にした。

表1 社会科の到達目標

【全体の到達目標】	
国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として主体的に社会に参画し、社会が抱える諸問題の解決のために人文・社会科学の知識・理論・情報を利用できる。	
公民的分野	これまでの哲学者や先人の考え方を手掛かりにしつつ、より良いキャリア構築を含む生涯にわたる多様な自己形成に関する考え方、他者と共に生きていくことの重要性、及び望ましい社会や世界のあり方について考察できる。
	自己が主体的に参画していく社会について、基本的人権や民主主義などの基本原理と基礎的な政治・法・経済の仕組みを理解し、現代社会の諸課題を考察できる。
現代社会の考察	現代社会の特質や課題に関する適切な主題を設定し、資料を活用して探究し、その成果を論述したり討論したりするなどの活動を通して、世界の人々が協調し共存できる持続可能な社会の実現について人文・社会科学の観点から多面的・多角的に考察、構想し、表現できる。

「現代社会A」は、1年生におかれており、社会科の導入科目としての役割も果たしている。上述したようなカリキュラムレベルからの視座をふまえて、本科目での到達目標を以下のようにした。

- (1) 歴史的かつ国際的な視点から現代社会をとりまく諸課題をとらえ、その特徴を理解する。【知識・理解】
- (2) 様々な史資料の分析から、現代社会の諸課題を考察し、授業で取り上げた諸事項の特色や相互関連性を説明することができる。【思考・判断・表現】
- (3) (1)と(2)をもとに、自らが設定したテーマから現代社会の諸課題を考察し、国際的な視点や今日につながる視点をふまえながら自身の探究テーマを具体的にまとめ、効果的に発信することができる。【学びへの主体性】

公民分野の学習を進めていくうえで、まさしく「現代社会」をとらえるためには、横軸である「国際的な視点」と縦軸である「今日につながる」歴史的な視点が必要となる。その二つの視座をもとに、SDGsのゴールとの対応関係を意識して、科目の前半では、時事的な 이슈にもふれながら、子ども、環境、労働、戦争、国際関係について扱った。先述したように、各項目の内容について、「現代社会A」は社会科の導入科目にもなるため、基礎・基本の確実な「習得」をはかりながら、史資料をもとにした「活用」の場面を設定した。科目の後半になる第9回に、これまでの学習を総合化するためのパフォーマンス課題を提示し、具体的な作成段階へと入った。その際に、探究的な学びのプロセスである①課題の設定、②情報の収集、③整理・

分析、④まとめ・表現を示し、教科書の巻末にある「学び方」に関するページを適宜参照するように助言した⁽²⁶⁾。さらに、SDGsの内容を深めるため、参考図書として蟹江憲史『SDGs（持続可能な開発目標）』を指定し、積極的に図書館を活用するように促した⁽²⁷⁾。最終回の一つ前の回（第14回）をパフォーマンス課題の完成と位置づけ、最終回（第15回）では互いの提案書を持ち寄る検討会を実施した。この検討会には、大学や高校の先生方にも開放し、学生のプロダクトおよびプレゼンテーションに対してご講評いただいた。また、授業研究を兼ね、授業後には協議会を設け、授業改善への視点を共有した。

3. パフォーマンス課題と作品例の検討

本実践では、SDGsを単元の主眼にしている。改めて、「パフォーマンス評価」とは、「ある特定の文脈の中で、さまざまな知識やスキルなどを用いながら生み出される学習者のパフォーマンス（作品や実演）をもとに学習者の学びや能力を評価する方法」であり、パフォーマンス課題はそのために設定された知の総合化を求めるような課題である⁽²⁸⁾。本実践でのパフォーマンス課題は以下のとおりである。

【パフォーマンス課題】

あなたは市役所でSDGsを担当する部署の職員です。

2030年までのSDGs達成をより確実にするため、市内に住む子どもたちにもSDGsの重要性を知ってほしいと考えています。そこで、市内の小学生がSDGsとのかかわりをもって、SDGs達成にむけた方策を知ることができる「SDGs小学生アクションプラン」を作成することになりました。

①SDGsの17あるゴールのなかから1つ（または複数）取りあげ、②その取りあげたゴールの重要性を説明したうえで、③そのゴールを達成するためにどのようなことができるか、④③の「アクションプラン」は社会的にどのような効果と意義があるのか、①から④を具体化させて、「SDGs小学生アクションプラン」の策定に向けた提案書を完成させなさい。

先述したように、パフォーマンス課題には「文脈の真正性」と「プロセスの真正性」が重要になる。上記の課題では、社会的文脈として「市役所でSDGsを担当する部署の職員」という役割が設定されている。さらに、「提案書」の完成というプロセスに鑑みて、「小学生」を宛先にしながら、①SDGsゴールへの焦点化、②ゴールの重要性、③具体的なアクション、④そのアクションの社会的効果と意義という形で構成要素を明示的に課題文のなかに組み入れた。これはライティング教育を意識したものであり、課題設定においては学生がこの課題に取り組むうえでの貢献を明示的にすること、そして作成されるプロダクトの対象（いわゆる「宛先」）を明文化することにした⁽²⁹⁾。

本実践でのパフォーマンス課題は第9回に提示し、第14回に合わせて完成（提出）とした。この完成に至るまでのプロセスにおいて、粘り強く自己調整をはたらかせながら、よりよいプロダクトを模索するために、以下のような観点を学生間で共有した。

- ・【観点1】：テーマ設定の独創性と明晰さ＝①・②に該当
- ・【観点2】：アクションプランの具体性＝③に該当
- ・【観点3】：アクションプランの社会的意義と効果＝④に該当
- ・【観点4】：「小学生」という対象者への意識とそのための工夫＝課題の状況設定
- ・【観点5】：全体の構成・文章力＝ライティングの基礎

さらに、これらの観点について、以下のような到達度ルーブリック（次頁）を示し、「十分に」満たすとはどういうことか、「独創的」で「効果的」な「提案書」とはどのようなものかを自らモニタリングできるようにした。これは「学習としての評価」観に拠ってたつものであり、学生自身が自らの学びをみとって見通すことに重きをおいている。個別に個人内で進捗状況と向き合うとともに、各回の最後に先述した探究的な学びのプロセスに照らした対話の時間を設けた。高専教育としても、自らの状況をみとって、よりよいプロダクトを模索することは、科学技術に携わって「創造」をめざすうえでも重要な基本姿勢になる。

【到達度ルーブリック】

段階	内容
S	すべての観点を十分に満たし、独創的な提案書を効果的に作成できている。
A	すべての観点を満たし、提案書を正確に作成できている。
B	課題内容を概ね理解し、いくつかの観点を意識した提案書を作成できている。
C	課題内容をこなしている状態にあり、提案書の体裁をなしていない水準にある。

今回の「提案書」は、高専の高学年次に研究ポスターを発表することもあることから、1枚(A4)にまとめる形にした。下記は、それぞれプラスチックごみやフードロスという社会課題を意識しながら、まとめられた「提案書」である。

【作品例 A】

【プラスチックごみ問題】

今回のアクションプランに対応するゴールは

14. 海の豊かさを守ろう

このゴールを達成する重要性

現在、特にプラスチックごみの問題が深刻化している。具体的には人間が捨てたプラスチックが海の生物(ウミガメや魚)が間違えて食べてしまうということがある。海の生物がプラスチックを食べてしまうことで命を落としたり、それらの生物を人間が食べて病気になる可能性がある。このことから、プラスチックごみの問題は1つで完結しているわけではなく、様々な問題と関連していることが分かる。したがってこのゴールを達成することが重要であると考えた。

提案するアクションプラン

私は「海辺に落ちているプラスチックごみの回収活動」を取り組むことを提案する。まず、海洋汚染の現状や企業の取組(紙製品や100%リサイクル素材の製品の開発、プラスチック容器の回収など)を分かりやすく説明する。その上で、子どもたちがSDGsに向けて協力可能なこととできることを知らせてもらうため、自主的な活動をメインとした。

このアクションプランがもたらす社会的効果と意義

この活動を行うことで、小学生がSDGsの存在や達成する必要性を認識すると同時に、子ども一人一人が協力できることがあると実感することができると思う。このことを実践した子どもが家庭内で話題にすることで、徐々に子どもから大人まで多くの人々の意識が高まるという効果があると考えた。

そして、人々のSDGsへの意識が高まることで、ごみの回収活動が海に流れるプラスチックごみを減らすことができる。これは海の生物や人間の命だけでなく、地球の生態系を守るにもつながるため、重要であると考えた。

【作品例 B】

2. 飢餓をゼロに 12. つくる責任 つかう責任

このゴールの重要性

世界中では、十分な食べ物を取ることか出来ず、苦しんでいる人が多くいる中生産されている食品の約3分の1が捨てられている。この状況を活用することで、食料不足を減らし、ごみの量を減らすことが出来る。

この現状を改善するために必要なことは...

- 十分な栄養のある食料を十分に手に入れられるよう、地球の環境を守り続けながら活動すること。
- 地球の環境と人口の健康を守れるよう、消費者としての責任ある行動をとること。

小学生に向けたアクションプラン

家の中にある食品の中で、賞味期限が近く使わずに捨てられそうな物を見つけたら、お家の人に教えてあげよう。そして、捨てられちゃう食料を減らしたり、フードバンクに寄付したりして、社会の役にたとう。

フードバンク

未開封(または開けていない物)で、捨てられちゃう食品を寄付して、「もったいない。をありがとう。」にする活動。

社会的な効果と意義

このアクションプランをすることで...

- 捨てる食料を減らすことができる。捨てる食料を減らすことにより、ごみの量が減って、地球に悪い影響を与えている「二酸化炭素」の排出量を減らすことができる。(地球のためになる)
- フードバンクに寄付できる。十分な食料を手に入れることができない貧困地域の子どものもとへ食料が行き、成長を助けることができたり、福祉施設のもとへ行き、生活を助けることができたり、人が生きていくための力となる。(十分に食料を手に入れられずに困っている人のためになる)

作品例 A は、ゴール 14「海の豊かさを守ろう」をもとに、プラスチックごみの問題が深刻化していることをうけて、企業の取組を紹介することなどを提案している。子どもたちがこのゴールや問題解決の必要性を実感することが、具体的なアクションになり、循環するプラスチックごみの連鎖をたちきることにもつながるとしている。

作品例 B は、ゴール 2「飢餓をゼロに」、ゴール 12「つくる責任 つかう責任」をもとに、環境問題や食料問題などがあるなかで、責任ある消費者としての行動を自覚し、フードロスの削減につなげようとしている。二つのゴールをあげているように、消費者として食品を適正に「つかう」ことで捨ててしまう量を減らし、そのことが地球環境の保全にもつながると提言している。

最終回(第 15 回)では、互いの「提案書」を持ち寄る検討会を実施した。参観者によるご講評を終え、改めて「よりよい提案書にするためにどのような工夫をしたか」、「作成プロセスを通じて SDGs に対する認識がどのように深まったか」という問いを投げかけ、その振り返りを記入し、本科目での学びを互いに総括しあった。それぞれ作品例 A と作品例 B の学生が記入した振り返りは以下のとおりである。

【振り返り】

【作品例 A】

私はよりよい「パフォーマンス課題」を完成させるために、2つの工夫をしました。1つ目は、より多くの情報を収集することです。私は中学生の頃からSDGsに興味を持ち、気になる新聞記事を集めていました。しかし、提案書の作成にあたり、1つのゴールについてより深く知っていく必要があると考えたため、それに加えて調べ、学びを深めました。2つ目は、SDGsを小学生に身近に感じてもらえるようなアクションプランを作成することです。小学生にSDGsの存在や達成する重要性を一方向的に説明するだけでは、小学生が自分には関係ないと感じてしまうかもしれません。そこで、自分で体を動かすアクションプランを組み、小学生にSDGsが身近なものであると実感してもらいたいと考えました。

私は本科目および「パフォーマンス課題」の作成過程を通じて、自分のできることを行うことで、SDGs達成に少しでも協力したいという考えが強まりました。また、情報を取り入れるだけでなく、自分のできることを日常生活の中で探し、行動に移していきたいと考えました。

【作品例 B】

私がよりよいパフォーマンス課題を完成させるために工夫したことは、「何がどう変わって誰のためになるのか」を具体的に説明したことだ。なぜそれを意識したかという、「この行動が誰のためになるのか」を知ることで、具体的な今後を想像でき、行動しようとするだろうと考えたからだ。

パフォーマンス課題の作成過程を通して、SDGsは1人残らず「世界の皆が目標や行われている活動について具体的に知って、頭に入れて生活しないといけないこと」だと改めて認識した。それは、SDGsは今後の地球や私たちの暮らしに大きく関わることだからだ。この課題を作成するにあたって、「4つの探究のプロセス」を1つずつ丁寧に行った。そうすることで、SDGsがどれだけ私たちの暮らしに近い存在なのかをより深く理解できた。

上記の振り返りからは、よりよい「提案書」をめざすために、対象（宛先）である小学生にとって身近で必要性を実感できるような構成にしたことが読み取れる。また、作成プロセスを通じて、SDGsが共通の普遍的な目標としてあり、私たちの暮らし、地域社会、そして地球全体とも関連していると考えに至ったと記している。単元の山場としてパフォーマンス課題があったことで、自己調整をはたらかせながら、よりよいものをめざして工夫し、学習内容に対する認識を深めていったことがわかる。

おわりに

本稿では、高専での社会科公民分野の実践をもとに、SDGsを題材としたパフォーマンス課題について検討してきた。カリキュラムレベルからその実践的意義を見出し、「習得」、「活用」、そして「探究につなぐ」視点を意識しながら実践を展開した。

高専教育は「中堅技術者の育成」をミッションとして出発し、近年ではグローバルマインドをもち合わせた創造的なエンジニアの育成がめざされている。国際交流も盛んであり、日本型教育のKOSENとして輸出されつつある⁽³⁰⁾。ここで重要となるのは、エンジニアとして多様な他者と協働して、社会とのかかわりを念頭におきながらよりよいものをめざす姿勢を育めるかどうかである。そこで、一般教育はその土台を育む役割を果たし、なかでも社会科はグローバル社会をとらえるうえでも重要な役割があるといえる。本稿での実践では、MCCの構造やそこにみられるキー概念をふまえ、「現代社会A」の授業でSDGsを題材にパフォーマンス課題を設定した。SDGsは、国連から提起された地球全体の普遍的な目標であることから、グローバル教育として意義のある題材になるものである。同時に、エンジニアとして社会実装を志向するとき、SDGsを念頭にもものづくりをすることは企業の社会的責任としても不可避なものとなる。17のゴールと169のターゲットという多岐にわたるなかで、科目の前半ではSDGsと対応させながら「習得」と史資料を用いた「活用」に重きをおいた。そのうえで、後半に入る段階で小学生を対象としたアクションプランを作成するというパフォーマンス課題を提示した。「現代社会A」は1年生に配置されていることから、アカデミック・スキルの基礎づけを意識するためにも、パフォーマンス課題の課題文には構成要素や対象（宛先）を明示的に組み入れた。ここでの土台形成が高専教育の集大成となる卒業研究にもつながるといえる。また、本実践では、協働的な授業研究をめざして、大学や高校から先生方にご参観いただき、学生の発表にもご講評いただいた。

高専は「疑似的な『複線型』」であることから、他の校種との連携や接続を開かれた形で模索する必要がある。授業研究を通じて開かれた高専教育であることが、高専教育の意義をより確かな視点でみつめることにつながり、そこで得られた知見が高専教育の到達点や課題を見通すきっかけにもなるといえよう。

謝辞

本研究の実践にあたって教育向上等推進経費の支援を受けた。貴重なご助言をいただいた社会科の先生方、参観をいただいた先生方と合わせて、深甚なる謝意をここに記します。

参考文献

- (1) 『モデルコアカリキュラム (MCC)』(独立行政法人国立高等専門学校機構、2023年) 1頁。
- (2) MCC、1頁。
- (3) MCC、5頁。教育課程の大綱的基準という位置づけや編成主体が各学校であることは、学習指導要領の基準性とも近似しているといえる。また、本稿の関連において、学習指導要領の前文には、「これからの学校には、こうした教育の目的及び目標の達成を目指しつつ、一人一人の生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる」とある(『高等学校学習指導要領(平成30年告示)』、17頁)。奈須正裕は、「国際的にも国内的も、SDGsは単なる1つの教育内容ではなく、カリキュラム全体を基礎づける中核的な価値観となっているのである」と論じている。田中治彦、奈須正裕、藤原孝章編著『SDGsカリキュラムの創造—ESDから広がる持続可能な未来』(学文社、2019年)32頁。MCCにも目標論や内容論としてSDGsが位置づいていることから、その点でも学習指導要領とMCCは近似性があるといえる。
- (4) 岩本晃代「高等専門学校創設法案の経緯と「複線型」教育の問題点」(『カリキュラム研究』第19号、2010年、所収)38頁。
- (5) 原田桃子「高専における技術者育成と歴史教育」(『ヨーロッパ文化史研究』第23号、2022年、所収)59頁。
- (6) 松倉紗野香「SDGs時代の国際理解教育の授業はどうあるべきか」(日本国際理解教育学会編著『国際理解教育を問い直す—現代的課題への15のアプローチ』明石書店、2021年、所収)211頁。
- (7) 石森広美『「生きる力」を育むグローバル教育の実践—生徒の心に響く主体的・対話的で深い学び』(明石書店、2019年)284頁。
- (8) 木原久美子「高専のSociety 5.0 対応人材育成と環境教育の現状」(『環境共生』第40巻第2号、2024年、所収)。
- (9) 『日本高専学会誌』(第27巻第2号、2022年、所収)。
- (10) MCC、12頁。
- (11) MCC、14頁。
- (12) 溝上慎一編著『学校教育目標のアセスメントとカリキュラム・マネジメントの組織化に向けて』(東信堂、2024年)12頁。
- (13) 前注(12)、12頁。
- (14) 前注(12)、13頁。
- (15) これまでも筆者は、歴史分野におけるパフォーマンス課題の開発的研究に取り組んできた。山下大喜「高等学校歴史教育における「パフォーマンス課題」の開発—明治の文明開化を題材として—」(『宇部工業高等専門学校研究報告』第70巻、2024年、所収)、同「高専歴史教育における「パフォーマンス課題」の開発—新紙幣の人物を題材として—」(『世界史教育研究』第10号、2024年、所収)。また、公民分野については、山下大喜「高専社会科公民分野から「探究につなぐ」視点を考える」(前川修一、梨子田喬、皆川雅樹編著『歴史教育「シン」入門—歴史総合から日本史探究・世界史探究へ』清水書院、2025年、所収)では、担当した「現代社会A」、「現代社会B」の全体を見通しながら、

パフォーマンス課題の実践を論じた。それに対して、本稿は「現代社会 A」の実践に焦点をあてたものである。

- (16) 前注 (12)、ii 頁。学校経営における R-PDCA サイクルについては、佐古秀一『管理職のための学校経営 R - PDCA 内発的な改善力を高めるマネジメントサイクル』(明治図書、2019 年)。
- (17) 前注 (12)、23 頁。
- (18) カリキュラム・マネジメントと授業研究の関係については、Tetsuo Kuramoto. (2024). *School-Based Curriculum Management: Teacher Education and Lesson Study Perspective*, Fukuro publishing.
- (19) MCC、163-164 頁。
- (20) MCC、47-48 頁。
- (21) MCC、47 頁。
- (22) MCC、50 頁。
- (23) MCC、48 頁。
- (24) 松下佳代『測りすぎの時代の学習評価論』(勁草書房、2025 年) 72 頁。
- (25) 前注 (24)。
- (26) 柴田義松は、教科書教材の機能として、①価値ある知を教科内容として伝達する機能、②知を系統的に構造化する機能、③合理的な「学び方」を学ぶための機能をあげている。パフォーマンス課題の作成や「探究につなぐ」という点においては、三点目の「学び方」を学ぶことも自覚化させていくことが重要になるといえる。詳しくは、柴田義松「教科書教材の教授学的研究」(日本教育方法学会編『日本の授業研究(下巻・授業研究の方法と形態)』学文社、2009 年、所収) 22 頁。
- (27) 蟹江憲史『SDGs(持続可能な開発目標)』(中央公論新社、2020 年)。このようなテキストリーディングは「言語活動の充実」の一環であり、高学年次にある卒業研究への基本姿勢を育むことを狙いに行っている。
- (28) 前注 (24)、66 頁。
- (29) 課題設定については、成瀬尚志編『学生を思考にいざなうレポート課題』(ひつじ書房、2016 年)が参考になる。
- (30) 詳細は、竹熊尚夫編著『日本式教育の海外展開とインパクト 往還する高専/KOSEN と日本式国際学校の新潮流』(九州大学出版会、2024 年)。